

令和2年度「不登校に関する研修会」(第3回) 講義記録

1 日 時 令和2年10月20日(火) 10:15~12:00

2 会 場 県立但馬やまびこの郷

3 講 師 神戸大学大学院 齊藤 誠一准教授

4 テーマ 不登校児童生徒およびその保護者との関わり方

5 内 容

(1) イントロダクション

- ・困っている保護者とともに困り、ともに悩み考える姿勢をもち、関わりのプロセスとその結果に応じて、そのとき最良と考えるアクションを取ることが重要である。
- ・もし取り組んだやり方でうまくいかなかったとしても、子どもや保護者のせいにするのではなく、なぜうまくいかなかったのかを考え、保護者にもそれを説明し、次のやり方を考える。
- ・どのようなやり方をとるかは、その場だけの対応ではなく、長期的な視野を持って考える。
- ・様々な場合を想定したうえで対応したり、やり方を考えたりする柔軟さが大切である。
- ・中一ギャップが不登校の原因となることも多いので、小学校卒業から中学校入学までの約半月で、子どもにはどのような変化があり、どのような経験をするのかをイメージし、なぜそれが不登校の契機になる可能性があるのかを理解する。
- ・中一ギャップ軽減のために、小・中学校の教師は互いにそれぞれの学校の「生活スタイルや仕組み、文化」を理解することも重要である。

(2) いじめとの関連について

- ・いじめの定義が変わり、どのような行為がいじめに当たるかではなく、「受けた行為をどのように感じたか」が重要視されるようになった。
→一般に良いとされる行動であっても、受け手にとってはネガティブな感情を生じさせることもある。
- ・いじめ事案に対する一連の指導のあとに、「どうすれば良かったのか」をともに考えることが大切。
→被害者と加害者の関係を理解し、謝罪を指導のゴールとするのではなく、それをはじまりとして、当該の子どもたちの「これから」について考え、新たな関係性作りを支援することが重要である。
- ・学校側がいじめに気づけないことがあるので、子どもと保護者からのいじめの訴えに対しては先入観なしに真摯に傾聴する。

- ・保護者から担任教師や学校への要求や批判は、期待の表れとして考える。
- ・いじめが不登校の原因となることもあり、不登校の背景にある要因が多様化しており、不登校の意味が複雑化しているため、なぜ学校に来ることができない状態にあるのかを予断なく考えたい。

(3) 家庭訪問について

- ・子どもは学校に居場所をなくして休んでいるのに、教師が家庭訪問するという事は「その学校が安全であるはずの家庭に来る」という感覚を子どもや保護者はもつという事を知っておく。
- ・いわゆる「よい子」は家庭訪問に来た教師に「会える」「話ができる」ことが多いが、無理をしている場合が多いことにも気をつけるべきである。
- ・たとえば「〇月になったら学校に来てね」といった約束の提案に対しては、「ノー」が言えない「よい子」は「はい」と言わざるをえず、そのことでさらに登校ストレスを大きくするになるので、安易な約束は慎むべきである。
- ・教師や保護者が子どもに期待を持つことは悪いことではないが、「よい子」はその期待に応えようとして、さらに無理を重ね、それによって心が押しつぶされることもある。
- ・家庭訪問の際に、例えば「カウンセリングでお子さんはこんなことを言っていたようですよ」とスクールカウンセラーから得た内容を保護者に伝えてしまうことがあるが、これにより子どもとスクールカウンセラーの信頼関係が損なわれることになるので、教師は厳格な守秘意識を持ちたい。
- ・家庭訪問の際に、まとめてこれまでの配布プリントを渡すことがあるが、提出期限が過ぎたプリントや開催が済んでいる行事案内のプリントを渡すことは保護者に「どうせ参加できないと思っていたに違いない」という不信感を生むので、参加できるかどうかは別にして、あるいは子どもに伝えてもらうかは別にして、保護者には提出期限前や開催前に届ける配慮が必要である。

(4) 虐待やDVについて

- ・虐待やDVにより不登校になることもあるので、これらの基礎知識は知っておきたい。
- ・虐待を受けた子どもの脳は傷ついており、例えば刺激に対して敏感または鈍感になることもある。
- ・虐待やDVの種類、影響、対応などの理解を深め、虐待通報が国民の義務であること、虐待やDVに対してどの機関に通報すればよいなども再確認しておく。

(5) 昨今の複雑化した不登校の子どもへの対応

- ・LGBTなどを含めて、子どもたちの内面は多様化し、繊細であり、理解がむずかしい。
→例えば対面では話せなくても、チャットでならコミュニケーションがとれることもあるなど、子どもと繋がることのできるチャンネルも多様に考えておく必要がある。

- ・保護者の訴えや要望・質問に対しては、単純にイエス／ノー、できる／できないで答えるのではなく、なぜ保護者がそうことを伝えてくるのかの背景を考え、そのことに興味を持って、考え、調べてから答えることが大切である。
- ・子どもや保護者、同僚など他者を理解するためには、経験だけでなく学習も大事である。
→たとえば、「ネットは危険、ダメだ」と言われることがあるが、本当にそうなのか根拠を示して説明できるだろうか？
- ・ゲーム依存はギャンブル依存と似ている脳の問題である。
→思春期の脳の特徴は「アクセルを踏めても、ブレーキを踏めない」ことであり、快楽や刺激を求める傾向が強い。
- ・直近の調査結果によると、青少年の死因のトップは「自殺」であるが、少し前までは衝動性を抑止できない結果として生じる「不慮の事故」がトップであった。

(6) 子ども・保護者との関わりについて

- ・不登校の子どもとの関わりはゼロベースからのスタートではなく、スタートラインはそれまでのその子との関係性によって決まる。
- ・子どもや保護者との相性が悪いこともあるが、それはいけないことではなくて、教師自身の学びや成長につながる機会として考えるべきである。
- ・良しと思って行ってもうまくいかないことがあることにも慣れる。
→うまくいかなかったことをすぐに子ども、保護者、自分のせいにならず、「なぜ」を考える。
- ・当たり前のこと、良かれと思つての言葉でも、保護者の信頼を失うこともある。
- ・発達検査など心理検査は、それを受けること自体が目的ではなく、それにより得られた結果から今後どのような支援ができるかの見通しまで含めて利用を考えるべきである。
- ・「頑張ろう／頑張る」という言葉に逃げない。
→言う側も言われる側も、「何を、どうすればいいのか」を具体的に理解した上で「頑張ろう／頑張る」が意味をもつので、「頑張ろう」と言い放つだけでなく、一緒に何をどのように頑張るかを悩み考える姿勢が大切である。

(7) 質疑応答

- ・不登校である兄の姿を見て、不登校傾向のある弟が、「なんで学校に行かなあかんの」と疑問を持っている。どう対処したらよいか。
→何とかして不登校にさせまいとして、登校ストレスを与えるよりは、「あなたのこともちゃんと見ているよ」というメッセージを示し、教師とも相談しながら学校で楽しい経験を増やすことが大切である。学校が楽しくなれば、「おにいちゃん家は楽しいそうだけど、自分は学校の方が楽しいなあ」と思えるようになり、兄と自分とは違うといった認識を持てるようになる。